

3月号 営農インフォメーション

水稻・麦の管理のポイント

水稻・・・令和6年産米に向けて種子準備・培土準備が始まります。

麦・・・穂肥の適期適量施用と排水対策を徹底するよう指導ください。

水稻

○ 種子準備

種子更新は、品種安定のために必ず行ってください。産地の信頼性の向上につながり、さらに品種証明になることから流通において重要視されています。

① 種子消毒

イネの種子には多くの病原菌が付着しているため、下記の方法で種子消毒を行います。

【温湯消毒】

温湯消毒（写真1）は、糸状菌病（いもち病、ばか苗病）、細菌病（もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病）、イネシנגレセンチュウに対して発病抑制効果があります。また、農薬を使用しないため、環境こだわり栽培に適しています。

塩水選に続いて温湯消毒を行う際は、塩水選後の湿った籾を数十分間放置して用いると発芽不良になるため、塩水選の直後に行います。

※温湯消毒の効果を安定させるためには温湯消毒専用の機械が必要です。

※JAで供給している苗は全て温湯消毒法で消毒しています。

●温湯消毒の方法

1. 60℃のお湯と冷却用に流水を張った容器を準備します。
2. 種籾を60℃のお湯に10分間浸漬し、10分後直ちに冷却用の容器に移し、流水で冷却します。浸漬・冷却中は籾袋をゆすり、時には籾袋を揉みほぐし、温度ムラができないように作業を行います。
3. 冷却後はそのまま浸種します。

※ お湯の温度が低いと防除効果が低くなり、逆に温度が高い場合や浸漬時間が長い場合は発芽率が低下するので、温度と時間をきっちり守るよう指導してください。

※ 温湯消毒時にムラがあると病気の発生につながります。

※ 温湯消毒後はそのまま浸種することが大切です。やむを得ず種子を保管する場合は、籾袋の内部まで十分に乾かす必要があるため、注意するように指導してください。お湯の量が少ないとお湯の温度が変化しやすいので注意してください。

※ うるち米は上記のとおり10分間の浸透ですが、もち米は6分間と浸透時間が異なるので注意してください。



写真1. 温湯消毒

【微生物農薬の使用法】

農薬名	適用病害虫	希釈倍率	使用時期	浸漬時間	使用回数
 エコホープDJ	ばか苗病 もみ枯細菌病 苗立枯細菌病 褐条病	200倍 (水10ℓに50ml)	浸種前～催芽前	24～48時間	—
	いもち病 苗立枯病		催芽時	24時間	
			浸種前～催芽時		

※エコホープDJは微生物農薬のため農薬成分数としてのカウントはされません。

※詳しい使用用途は「令和4年産米 水稲施肥設計書・資材申込書」をご覧ください。

※使用前には必ず農薬容器等のラベルをよく読み、使用方法や登録内容を厳守するよう指導してください。

【薬剤による消毒】

商品名	 テクリードCフロアブル	 スミチオン乳剤
適用病害虫	もみ枯細菌病・ばか苗 いもち病・苗立枯病 苗立枯細菌病	イネシンガレセンチュウ
使用方法	24時間浸漬(低濃度処理)	6～72時間浸漬
希釈倍率	200倍(水10ℓに50ml)	1000倍(水10ℓに10ml)
使用回数	1回	1回

○使用方法

<p>【低濃度処理法】</p> <p>スミチオン乳剤(1000倍)</p> <p>+</p> <p>テクリードCフロアブル 200倍に24時間浸漬</p>	<p>【高濃度処理法】</p> <p>スミチオン乳剤1000倍に24時間浸漬</p> <p>↓</p> <p>テクリードCフロアブル 20倍に10分間浸漬</p>
--	--

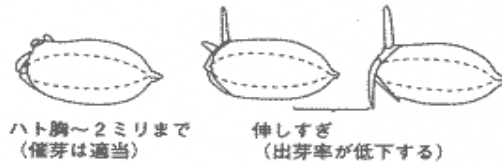
※使用前には必ず農薬容器等のラベルをよく読み、使用方法や登録内容を厳守するよう指導してください。

②浸種

種籾は積算温度が100℃（平均水温が10℃の場合10日間）になると発芽し、呼吸・吸水むらによる発芽不良を防ぐため水は種子の2倍以上で浸種します（種子：水＝1：2以上）。浸種時の水温が20℃以上の高温の場合、浸種ムラが発生し発芽の揃いが悪くなったり浸種中に発芽することがあります。また、10℃以下の低温であると種子消毒剤の効果が落ちてしまいます。

③^{さいが}催芽

温度を30～32℃に保ち、はと胸状に催芽します。



【小 麦】

○生育状況・・・本年は平年に比べ生育は早い状況となっております。

2月20日に実施した生育調査では、草丈は約33.3cm、茎数は㎡あたり約497本となっております、茎数がやや少ない状況です。

○今後の管理

① 施肥

平年の茎数が確保でている圃場では穂肥の施用時期です。

3月上旬の茎数の目安は、700本/㎡です。

生育状況に合わせ穂肥の施用量の調整が重要です。

【全層施肥】 化成肥料 20-0-10 20 kg/10a

【省力型分施】 セラコート R2500 30 kg/10a

※後期重点型施肥では、2月中旬～下旬頃にかけてN（チッソ）12 kg/10a の施肥が行われている状況です。

② 基肥に麦パンチ（一発肥料）を散布している場合は、基本的に穂肥の施用は必要ありませんが、葉色が落ち、茎数が不足している圃場については、窒素成分で2kg/10a程度（化成肥料20-0-10の場合10kg/10a）追加施用するよう指導しています。

（※本年は茎数が少ない圃場では一発肥料でも、つなぎ肥の穂肥を散布されています。）

③ 排水対策

排水対策がしっかりと行われていない場合、明渠の滞水により、施した肥料の吸収が阻害され、効果が出にくい場合があります。その結果、穂数不足になり減収の要因となるので排水対策の励行が重要となります。湿害を防止するため、排水溝のつなぎ部分や排水口付近に水がたまっていないかを施肥前に確認し、滞水している場合はスコップ等で排水溝を手直しする必要がありますので、定期的に巡回を行ってください。